



博士 (人間科学) 学位論文 概要書

非言語行動が意識性に及ぼす効果の研究

Studies in Effects of Nonverbal Behavior on Emotional Awareness

2003年 1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

鈴木 晶夫

Suzuki, Masao

人間は、空間的、時間的、社会的、に制約を受けている。人間に与えるこれらの影響を考える際に有効な手がかりとして、言語はもちろんであるが、非言語行動があげられる。非言語行動がその行動をとっている主体者の内的状況にどのような影響をおよぼすのか、また外的状況の変化によりどのように影響されるのかという機能的側面について検討した。

非言語行動が意識性に及ぼす効果の研究では、ある姿勢が、その姿勢をとっている主体である人間の内的状況、すなわち意識性あるいは気分・感情にどのような影響を及ぼすのか、また、その姿勢を実際に試みた場合と、同じ姿勢をイメージした場合とで、意識性あるいは気分・感情などの指標にどのような差異がみられるかを検討した。また、ある特定の環境状況、あるいは心的状況に対して、どのような姿勢がとられるか、その傾向を調べ、各状況における特徴的な姿勢を抽出した。自信、落胆、拒絶、緊張、注意、基準姿勢という特徴的な姿勢をとったときの意識性やイメージと行動との関係について検討し、対自的には体幹の上下方向の変化が大きな影響を与えていることが示唆された。対他的には、体幹の左右方向（回転）と前後方向の次元が関係していることが示唆された。対自的な機能の研究として躯幹と顔の向き（上下方向）に注目し、これらを実験的に操作し、姿勢の変化がその行為主体者の意識性にどのような影響を及ぼすかについて検討した。さらに、特徴的な姿勢をとらせ、状況・環境変化として、音楽を提示し、意識性の変化を検討した。次に、姿勢における躯幹の曲げる角度（上下方向）と回転に注目して、5種類の姿勢の意識性を調べ、その姿勢と言葉を組み合わせた際の、姿勢と発話内容とのずれの関係についてSD法を用いて検討した。人間の最も基本的な動作である歩法には、歩行時の姿勢、腕の振り、つま先の向きなど様々な要因が含まれる。姿勢や歩法の変容が対自的に、心身の健康にどのように影響するのかについて検討した。これらの結果から、上記のどのような状況下においても行為主体者の意識性に及ぼす影響として姿勢要因の大きさが示された。

姿勢以外の非言語行動が意識性に及ぼす効果の研究では、まずパーソナル・スペースの代表的な定義に従い、正面、真後ろ、左右という4方向で、ある距離における気づまりの程度を恒常法的な測定方法によって測定した。本研究では、気づまりの程度を測定し、社会的関係の要素である性別による組み合わせ、時間的要素である繰り返しの効果、視線の効果、方法論的な問題点などが示唆された。また、パーソナル・スペースが限りなく近づいた身体接触の研究では、過去においてどのような直接的な身体接触を経験し、現在に至っているのかを、両親、友人という人間関係において調査し、身体接触の現状を調査した。幼児期から現在に至るまでの6つの時期においてどの程度触られたかを親子、友人などの人間関係の違いにより自己評価させた。さらに、媒介物による間接的な身体接触を考え、自分のもの、父親・母親のものの洗濯物

の混合に対する許容について検討した。また、物を共有することについても、親、友人、他人（父親、母親、兄弟、親友、顔見知り、未知の人）という人間関係のなかで、その間接的な接触の許容度から関係性の様相について検討した。その結果、洗濯物の混合や物の共有の許容度に対して関係性が大きく影響することが示され、特に父親との関係が特徴的な傾向を示した。

これまでの実験的研究を参考に、現代青年層の姿勢の特徴を調査し、日常における自分の姿勢や身体各部位の自己評価、抑うつ傾向、健康感、自尊感情などの関連性について検討した。また、身体と精神の関係を考える場合、デカルト以来の西洋的思考と同様に東洋的な身体と精神の考え方からの調査・分析も試みた。その結果、姿勢がうつ傾向、健康感、自尊感情などと関連していることが示された。

以上のことから、非言語行動、特に姿勢の意識性に及ぼす効果に関しては上下方向の影響が大きく、空間行動では、前後方向、繰り返しという時間の効果が考えられる。直接的・間接的身体接触の研究や姿勢の自己評価研究では、社会、相互作用、関係性に影響を受けていた。姿勢は自分を知るのによい手段であり、パーソナル・スペースは他者からの影響を知るのによい手段であり、身体接触は自分と他者との関係を知るのによい手段であるといえるかもしれない。これらから、非言語行動を含めた「からだから伝わる情報」にどのように気づくかが重要と考えられる。そこで、身体の意味と功用を考える上で「身づく」「身づき」という概念を提唱する。